

「お話遊び」から「国語の授業」へ

—「おおきなかぶ」の場合—

原田 留美

新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

Story play and Japanese lesson in Elementary Schools

—Research of "The Giant Turnip"—

Rumi Harada

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

キーワード

小学校国語授業, お話遊び, 「おおきなかぶ」

要旨

保育園・幼稚園では、内田莉沙子訳の「おおきなかぶ」がお話遊びに用いられることが多いが、小学校国語の授業では西郷竹彦訳の「大きなかぶ」が教材として用いられることが多い。これら二つの「おおきなかぶ」は、あらずじは同じものの、文章表現の細部に違いが見られる。このことは二作品の個性の違いに繋がっている。内田訳の「おおきなかぶ」は、かぶが抜けるかどうかの結末を重視しており、文章のリズミカルさが魅力である。西郷訳の「おおきなかぶ」は、子どもたちに、登場人物の気持ちや作品のテーマを考えさせる表現となっている。これらの個性の違いから、保育教材としては内田訳の「おおきなかぶ」が、小学校国語教材としては西郷訳の「おおきなかぶ」が、よりふさわしいと考えるものである。

Key words

Japanese in Elementary Schools , teaching materials of story play , "The Giant Turnip"

Abstract

The Giant Turnip, which was translated by Risako Uchida, is read by teachers in kindergartens. At elementary schools, teachers use Takehiko Saigo's translation of *The Giant Turnip* as a Japanese lesson teaching material. Although these two versions of the picture book have the same story, the texts are not the same thus making these picture books distinctive from each other.

Risako Uchida's translation puts greater importance on the conclusion; when the turnip is pulled out. Moreover, the text is rhythmical. Takehiko Saigo's translation focuses more on the feelings of the characters and the theme of the tale.

Therefore, Uchida's translation is suitable for kindergarten children whereas Saigo's translation is excellent as a teaching material for an elementary school.

I came to this understanding by comparing the childcare using *The Giant Turnip* as teaching material for a story play with lessons in the elementary school using *The Giant Turnip* as teaching material.

はじめに

ロシア昔話の「おおきなかぶ」は、日本の保育園・幼稚園で広く保育に取り入れられており、子どもたちによく知られている話の一つである。様々な出版社から絵本が出されているが、1966年の初版以来現在も刊行され続けている福音館書店のものが最もよく知られた作品と言って良いだろう。トルストイが再話したものを内田莉莎子が訳し、佐藤忠良が挿絵を担当している。

物語構造がシンプルでわかりやすいため、「おおきなかぶ」は二歳～三歳くらいの子どもの保育に取り入れられることが多いようであるが、この昔話に、子どもたちは小学校入学後、国語の授業の中で再会することになる。現在、小学校で使用されている検定教科書のすべてに「大きなかぶ」が収載されているからである。

けれども、保育園や幼稚園で保育者が読み聞かせた「おおきなかぶ」と、国語の教科書に載っている「大きなかぶ」は同じとは限らない。東京書籍・大阪書籍・教育出版・学校図書版の「おおきなかぶ」は内田訳に依っているが、小学校国語教科書のシェアトップをしめる光村図書版は西郷竹彦による訳を採用しているからである。粗い言い方になるが、日本では、子どもたちの多くは幼児期には内田訳の「おおきなかぶ」に親しみ、小学校入学後にはそれとは異なる西郷訳「大きなかぶ」を知ることになると言えるだろう。ちなみに西郷訳は絵本としては出版されていない¹⁾。

内田訳と西郷訳、この二つの「おおきなかぶ」は、あらずじは共通しているものの細部の表現においては様々な違いが認められる。深澤広明と大本紀子はこれらのテキストの違いについて、保育者と小学校教員がそれぞれどのように受け止めているかをうかがい知る興味深い話を伝えている²⁾。

ある授業研究のサークルで、その年から小学校教科書の教材である「おおきなかぶ」の翻訳者が変わったことが話題になった。それまでの西郷竹彦訳から内田莉莎子訳になったのである。小学校の先生は、訳者が変わって、かぶをひっぱる登場人物の順序が変わったことや、そのために伝えたいことをうまく伝えられなくなってしまったと言い、一方、一緒に参加していた保育所の先生は、子どもたちとよく読む絵本だけれど、登場人物の順序についてなどかんがえたこともなかったし、子どもたちは繰り返しの言葉のリズムを感じながら声に出し、身体を動かすことで盛り上がり楽しんで作品だということ話を話した。

同じ昔話を用いているが、この反応の違いは興味深く思われる。就学前と後とでは子どもたちの発達段階が異なるため、当然のことながら保育と小学校教育とではその活動内容が異なる。その活動内容の違いに、それぞれのテキストはどのように関わっているのだろうか。本稿では、この点について見ていきたい。

1 テキストの相違点

先に述べたように、内田訳と西郷訳とでは、文章表現に違いがある。小学校教員が違和感をもったというそれらの違いについて、まず私なりに整理をしておきたい。

「かぶをうえる」と「かぶのたねをまく」

内田訳では「おじいさんは かぶをうえました。」とあるが、西郷訳では「おじいさんが、かぶの たねを まきました。」となっている。田中康子によれば2004年時点で、内田訳に依っているテキストでも学校図書版を除いたすべてのものがこの部分を「かぶのたねをまきました」としている³⁾。

この点に関しては、ロシアと日本とではかぶの栽培法が異なる（日本では種をまいた上で間引くが、ロシアでは指で土に穴を開けて種を植える。）ことが関わっているようである⁴⁾。また、「うえる」の語義も問題になったようである。

「うえる」は、「植物の根などを土の中に埋める」という意味が一般的であり、「木をうえる」「苗をうえる」というように用い、「たねをうえる」とはあまり用いない。（中略）「かぶはうえるのじゃない」という児童がいた場合、その児童を納得させることは、おそらく困難であろう。広義には「たねをうえる」でかまわないにもかかわらず、発達段階を考慮してあえて原文を改めたのである⁵⁾。

この変更については、訳者の内田は納得していないようで、次のように言っている⁶⁾。

まくとうえるとではまったく違います。まくというのは複数の種子をぱらぱらとまくことでしょう。でもうえるは、一つずつ土の中に埋めこむことです。ぱらっと種子をまいて、どうしてとてつもなく大きなすてきなかぶが育つでしょうか？

難しい問題であるが、栽培するかぶに対するおじいさんの愛情や言葉のリズム感の点から、田中は内田の見解と訳とを支持している⁷⁾。

ここで一つ疑問に感じるのは、「種をうえる」という使い方が一般的ではないという理解についてである。手元にある『国語大辞典』（小学館 1982年）を繙いてみるに、「うえる」の項目には「植物を生長させるために、その種子や根を土中に埋める」とある。「まく」の項目には（何かを一面に散らばらせるの意）の注書きの後に「種を散らし植える」とある。「かぶの種をまく」という表現よりも「かぶをうえる」という表現の方がおじいさんの思いの深さがより伝わるとした内田の選択は、辞書的な意味においても矛盾はしないのではないか。

さらに、ロシアと日本とでかぶの栽培法が違うのなら、そのことを含めて小学校1年生の子どもたちに伝えるというのは困難きわまりないことなのだろうか。それぞれの国には異なる文化があるということを知らせることは、作品理解が混乱するほどの大問題であるのか、疑問が残る。

「かぶのたねをまきました」としているにもかかわらず、光村図書版にはおじいさんが一粒一粒の種を土中に埋め込んでいると解せる挿絵がついている。「かぶたねをまく」と「かぶをうえる」の表現を巡っては、教科書会社自身の判断が揺れているのであろう。

なお、音読した場合のリズムについては、簡潔な分、内田訳のほうが心地よさが勝る印象を私も持つ。西郷訳では「たねを」という修飾語が入ることで文章が説明的になる分、リズムミカルな心地よさは損なわれると思われる。

「あまい げんきのよい とてつもなくおおきい」と「あまい あまい、大きな 大きな」

前者が内田訳、後者が西郷訳である。これらの文の直前に、おじいさんが「あまい あまい かぶになれ。大きな 大きな かぶになれ」と、祈りを込めてかぶを植える場面が

両作品に共通してみられる。西郷訳ではこの祈りの言葉と実りの説明部分が合致しているため、おじいさんの願いの通りの収穫が得られたことが読み取れる。これに対して内田訳では「げんきのよい とてつもなく」という変化がつけられている。この表現、とりわけ強めの語句を伴う「とてつもなくおおきいかぶ」からは、甘さもさることながら、おじいさんの願いや予想を遙かに超えた大きいかぶが出来たことが伝わってくる。予想以上に大きいかぶが出来てしまったことが、この後どのような物語展開を呼び込むのか、読み手は引きつけられることになる。

おじいさんの願い通りの収穫であったか、おじいさんの予想を遙かに超えた大かぶが出来てしまったかの違いを、ここから見て取ることが出来る。

「おじいさんがかぶをひっぱって」と「かぶをおじいさんがひっぱって」

日本語は、文の始めの方にある単語よりも文末に来る単語の方がより印象に残りやすいという性格を持つ。前者の内田訳では「かぶ」の方に、後者の西郷訳では「おじいさん」の方に意識が向きやすい文構造となっているといえる。

かぶが抜けるまでの接続詞の使い方の違い

大きなかぶはおじいさんたちを手こずらせる。おばあさん、孫、犬、猫、ねずみと協力者が加わり、かぶ抜きに取り組むという繰り返し構造で話が進んでいくが、この繰り返しの場面ででてくる「かぶは ぬけません」の前に出てくる接続語の使い方に違いが見られる。

内田訳では「ところが」「それでも」「まだ まだ」「まだ まだ、まだ まだ」「それでも」となっている。一方西郷訳では「けれども」「それでも」「やっぱり」「まだまだ」「なかなか」となっている。

これらの接続語のうち、西郷訳の「やっぱり」が目を引く。他の接続語が逆接的なものであるのに対し、「やっぱり」はそうではないからである。『国語大辞典』には副詞の「やはり」は「事態・状況が変化していないさま」「予期した通りの事態である様、順当な事態であるさまを表す語」等と有る。「やっぱり」はむしろ順接に近い性格をも含む語であるといえる。この点について荒木英治は接続詞に関する西郷の考えを受けて、次のように言及している。⁸⁾

「つなぎ言葉」をただ単に、前の文の内容と後の文の内容をつなぐととらえたのでは、前後の文の意味が同じなのに「つなぎ言葉」が逆になるということを説明できません。それでは、どのように考えればよいのでしょうか。実は、「つなぎ言葉」は、話者の見方をつないでいるのです。つまり、二場面では、話者はおじいさんが引っぱって抜けるだろうと予想したけれども抜けなかったということです。

そして、四場面では、もう二回も抜けないことが繰り返されているので、話者は今度も引っぱっても抜けないだろうと予想したら、やっぱり抜けなかったということなのです。

このように、「つなぎ言葉」によって、前の話者の見方と後の話者の見方がつながっているのです。そして、話者の目と心を通してイメージを体験する読者の見方も、この「つなぎ言葉」によってつながっているといえます。

また、読者は話者とちがって話の先まではわからないので、話が右に曲がるのか左に曲がるのかということを、ちょうど自動車の方向指示器（ウィンカー）で先導者が合図

をるように「つなぎ言葉」で話者が読者に予告するという働きもこの「つなぎ言葉」にはあります。

西郷による訳文では読者の反応を意識した言葉が選ばれていることを指摘していると理解できるだろう。

引っ張る順番の違い

この作品には、「誰々が誰々をひっぱって」という形の文が繰り返し出てくるが、内田訳と西郷訳とでは、登場人物の順番が異なっている。最後の、かぶが抜けるところを抜き出してみる。

内田訳

ねずみが ねこをひっぱって ねこが 犬をひっぱって 犬が まごをひっぱって まごが おばあさんをひっぱって おばあさんが おじいさんをひっぱって おじいさんがかぶをひっぱって

西郷訳

かぶを おじいさんがひっぱって おじいさんを おばあさんがひっぱって おばあさんを まごがひっぱって まごを 犬がひっぱって 犬を ねこがひっぱって ねこを ねずみがひっぱって

この違いについて、荒木は「文や文章では、終わりにいくほどイメージが濃くなり、文末での決定性が強くなるという表現の特質」をふまえ、二つの訳では「クローズアップされる人物のイメージが全く異なる」と指摘した上で次のように言っている。⁹⁾

「大きなかぶ」は協力・連帯がテーマであるといわれています。その通りです。しかし、もう一つ、小学1年生の教材として訳すという条件があります。

この物語の人物の登場の順序は、大きなものから小さなものへとなっています。この順序の意味は、単にみんなで力を合わせたということにとどまるものではなく、最後に小さな存在の ねずみ が登場して、その参加によってみんなの願いがかなったという「小さな存在の大きな役割」という意味をも見出すことが出来ます。そのためには、内田莉沙子再話では おじいさん のイメージがクローズアップされてしまうので授業を通して子どもと右のような意味づけをすることがとても難しくなります。

ねずみ のイメージをクローズアップさせて子どもたちと意味づけをするためには、西郷竹彦再話の語りの方がねうちがあるといえます。

文のはじめで伝えられる事柄よりも文末で伝えられる事柄の方が印象に残りやすいというのは事実である。ゆえに、「大きなかぶ」という作品に「小さな存在の大きな役割」を読み取らせようという意図の元に授業を展開する場合には、確かに荒木の言うように、内田訳よりも西郷訳の方がやりやすいであろう。

けれども、内田訳と西郷訳の表現を比較した場合に何がクローズアップされるかという点の理解については、荒木の見解とは異なる捉え方も可能なのではないかと考える。西郷訳については、ねずみがクローズアップされるという捉え方に異論はない。内田訳について、登場人物のうち誰がクローズアップされるか、という問いかけに対してなら「おじいさん」と答えるのが正しいだろう。だが、内田訳の最後に来ているのは「かぶ」である。つまり、ねずみからおじいさんまで総掛かりで引っっぱっている「かぶ」がクローズアップされているという理解も成り立つのではないか。個々の登場人物よりも、かぶが抜けるか

どうかに関心の関心が寄せられやすい、そういう表現に内田訳はなっているのではないだろうか。

「やっと」と「とうとう」

物語の最後の文にも違いがある。内田訳は「やっと かぶは ぬけました」であるのに対し、西郷訳は「とうとう かぶは ぬけました」となっている。大きな違いはないとの理解も出来ようが、些細ではあるもののニュアンスに違いがあることも否定できない。『国語大辞典』によれば「とうとう」は「物事の最終的な結果が現れるさま」で、一方「やっと」は「何らかの制約や困難があったために成立しがたかった行為・状態がどうにか成り立つさまを表す語」となっている。大きなかぶを抜く行為の難しさ、ひいてはそれを成し遂げた時の達成感をより強く伝える表現と言えるであろう。読み手にもかぶが抜けた喜びがストレートに伝わるものと言える。

これに対して西郷訳では、どちらかという「物事」、すなわちおじいさんからねずみまでが協力してかぶ抜きに取り組んだことの、「最終的な結果」、つまりかぶが抜けた事実を伝えること、に重みが置かれた表現と捉えることが出来る。ここでより強く印象づけられるのは、皆で協力した結果かぶが抜けたこと、であろう。

以上の各相違点をふまえるに、似たように見えるテキストではあるが、内田訳と西郷訳には性格の違いが認められると考える。それぞれの特徴をまとめるのならば、内田訳の方は、かぶが抜けるかどうかに関心が合っており、物語の結末も「抜けた」喜びや達成感が伝わりやすいテキストと言えよう。文章もよりリズムカルである。これに対して西郷訳は、表現の細部に注目することで人物たちの位置づけや物語の流れが客観的に把握しやすいテキストで、かぶ抜きに参加していった登場人物がより印象に残りやすい、かつ、かぶが抜けたのは皆で協力した結果であることに目がいきやすいものとなっていると捉えることが出来ると思われる。

では、以上のようなテキストの性格の違いをふまえた上で、保育や教育の実践活動がどのように行われているのかについて見ていきたい。

2 小学校国語での「大きなかぶ」授業展開の特徴

実際の授業や保育における小学校と保育園・幼稚園の教育・保育活動の違いについて見る前に、学習指導要領と幼稚園教育要領・保育所保育指針では「大きなかぶ」を素材とした活動、特に作品内容の理解と関わりがあると考えられる項目はどのように記述されているかについて確認しておきたい。この点については深澤・大本が2004年時点での学習指導要領等をもとに整理をしているが¹⁰⁾、2009年4月施行のものがすでに出されているため、そちらで確認をする。

小学校学習指導要領

(1) 読むこと的能力を育てるため、次の事項について指導する。

イ 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。

ウ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。

保育所保育指針

エ 言葉 2 内容

いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。

絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。

幼稚園教育要領

言葉 2 内容

(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。

(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。

さて、具体的な授業や保育の活動の展開過程の違いについてであるが、この点に関して¹¹⁾も深澤・大木がすでに次のようにまとめている。

表からも明らかなように、保育においても小学校の授業でも、大きく言えば、まず教材（絵本、教科書）の読み聞かせを聞き、声に出して読み、動作化、劇化するといった展開である。しかし、子どもの活動、学習のてかりとなるのは、保育の場合、保育者の読み聞かせと絵本の絵であり、子どもたちは、言葉（音声言語）の響きや絵の様子からイメージや言葉を豊かにしている。一方、小学校の場合、教科書にある言葉（文字）をてがかりにして、登場人物の様子がわかる部分に線を引いたり、本文中から登場人物の気持ちを想像する。

さらに、小学校教育での教師の発問については「ほとんど教科書から抜き出したり、教科書に書かれている言葉から想像したりする問いである（表4参照）。これらの発問から、小学校においては子ども自身の主観的な気持ちから離れて作品の世界を理解した上での、客観的な認識に基づく表象的、言語的活動がかえってくることを前提としていることがわかる。」と述べているが、これにたいして保育における保育者の援助については「子どもの表現を促したり、雰囲気を作る言葉かけが多」く、それらは「子どもからワクワクドキドキして自然と表現したくなるような感覚運動的活動を前提としている言葉かけや働きかけであると言えるだろう。」とまとめている。¹²⁾

深澤・大木は、保育においては、読み聞かせや絵を手がかりに作品世界のイメージを子どもたちに持たせ、さらに表現意欲を引き出す働きかけがなされているが、小学校の授業では、具体的な言語表現に基づいて登場人物の様子や心情などを客観的に把握する事を通しての作品理解が目指されている事を指摘していると考えられるものだが、特に小学校の授業において、作品理解ための活動がどのようにテキストに沿って行われているか具体的に把握するために、深澤・大木が分析した資料と一部重なるが、授業実践の記録について確認していきたい。取り上げるのは、『「おおきなかぶ」の授業』と『「おおきなかぶ」の言語技術教育』に掲載されている計三種の授業実践記録で、すべて西郷訳のテキストに基づいたものとなっている。これらの記録に見える、作品理解と直接的に関わる発問のねらいを箇条書きにしてまとめてみる。

A 『「おおきなかぶ」の授業』の実践記録の場合

- ・繰り返し構造に気づかせる。
- ・願いの言葉「あまい あまい かぶになれ。大きな 大きな かぶになれ」の語順が、かぶの価値の順序に繋がっている事に気づかせる。
- ・重ね言葉の表現形式を取ることにより、願いの強さが伝わることを理解させる。
- ・「うんとこしょ どっこいしょ」の後の接続語の機能の違いについて気づかせる。途中で「やっぱり」を用いることから、抜こうとして必死になっている登場人物の姿を語

る話者がかぶ抜きの困難さを強く感じとっていることが伝わる。しかし登場人物たちは話者の判断を余所に諦めることなく引っぱり続ける。読み手は客観的にはきわめて困難な場面であることを理解しつつも、諦めずに努力し続ける登場人物に心を寄せ、応援したい気持ちを持つようになる。

- ・かぶ抜きの場面での描写では、ねずみが最後に出てきていることから、最も小さな者の助力がかぶ抜きの成功に繋がっていることを理解させる。

B 『「おおきなかぶ」の言語技術教育』の樫村みどりの実践記録の場合

- ・場面構成の把握を通し、繰り返し構造になっていることを理解させる。さらに登場人物を把握させることで、物語の全体像を掴ませる。
- ・かぶの種をまいた際の、おじいさんの思い(願い)を理解させる。
- ・「うんとこしょ どっこいしょ」の後の接続語の違いに着目することで、かぶが抜けないことに対する各場面での登場人物の思いの違いを理解させる。
- ・かぶが抜けたときの登場人物の思い(喜び)を理解させる。

C 『「おおきなかぶ」の言語技術教育』の瀧沢葉子の実践記録の場合

- ・かぶの種をまいた際の、おじいさんの思い(願い)を理解させる。
- ・登場人物とその役割を整理することで、物語の流れを理解させる。
- ・かぶを抜きに取り組んでいる間の、登場人物たちの思い(抜けない事への困惑、助力を求めたい気持ち)や必死な姿を理解させる。
- ・ねずみの助力がかぶ抜きが成功したことに気づかせる。
- ・再度物語の流れを把握することで、繰り返し構造に気づかせる。さらに「うんとこしょ どっこいしょ」の後に来る接続語のうち、最後の「とうとう」がそれまでの接続語とは役割が異なっており、物語の流れを変えていることに気づかせる。

三種の実践記録はいずれも、言語表現のあり方を丁寧に見ていくことで登場人物の思いや物語展開を把握することを目指している点が共通していることが確認できると思う。そして特に、「うんとこしょ どっこいしょ」の後の接続詞に「やっぱり」が含まれていること(A・B)や、かぶを引っぱる登場人物たちの描写では、おじいさんからねずみへという順番になっていること(A・C)に注目させて作品理解をさせようとしているところからは、西郷訳のテキストの特徴を生かそうという姿勢が感じられる。冒頭で、内田訳のテキストに変わったことで伝えたいことをうまく伝えられなくなってしまったとする小学校教師の発言に触れたが、それはこのあたりのことと関わると推察されよう。内田訳のテキストでは、具体的な言語表現に基づいて登場人物の様子や心情などを客観的に把握する事を通しての作品理解ができないなどということは無論無いが、授業を展開する上で上記の点の理解を重視する教師ならば、テキストの変更に戸惑うのも無理無いことであろう。

3 保育園・幼稚園での劇遊びと小学校での劇遊び

最後に「おおきなかぶ」の劇遊びについて、小学校での取り組みと保育園・幼稚園での取り組みを比較し、それぞれの作品理解の仕方とどのように繋がっているかについて見てみたい。考察の対象として取り上げるのは幼児の劇遊びの参考書『低年齢児の劇ごっこ集』と、小学生の劇遊びの参考書『小学校劇の本 1 1～2年生の劇の本』である。

まず、幼児向けの劇遊びについて。上記の参考書では、三歳以下の子どもたちに取り組ませる劇の一つとして内田訳の「おおきなかぶ」が取り上げられている。そこでは劇遊びのねらいについて、「文章を読むだけでなく、実際にまねっこして遊ぶことで、想像力や表現力が広がっていきます。¹⁴⁾」と説明されている。その上で劇遊びの取り組みとして、踏むべき段階が提案されているが、それをまとめると次のようになると考えられる。¹⁵⁾

まず読み聞かせを行うが、この際には書かれている文章に拘ることなく、自由にやりとりをしながら物語世界に親しませる。絵本を通じてコミュニケーションを楽しむことを遊びの第一歩とする。

次に、絵本の内容をごっこ遊びの形で毎日の遊びの中に取り入れる。主要な小道具などをさりげなく保育室内に配置するなど、保育者は遊びのきっかけ作りをする。

ごっこ遊びを十分楽しんだら、配役（ただし三歳以下の子どもの場合には、配役が難しいこともある。その場合には、全員同じ役という配慮も必要。）やお面をはじめとした衣装作り、簡単なセット作りを含めた劇ごっこにする。（衣装や小道具・大道具製作は保育者が中心となる。）

以上の点をふまえた上での「おおきなかぶ」の劇遊びの具体的内容のポイントについては、以下の通りである。¹⁶⁾

ねらいは、「言葉のリズムを味わいながら、言葉や動作の繰り返しを楽しむ」ことと、「昔話を通して、みんなで協力することの大切さを感じる」ことが挙げられている。

掲載されているシナリオでは、一応の配役が為されていることが前提となっているが、物語の進行は保育者のナレーションにゆだねられており、子どもたちが言う台詞はごく限られている。かぶを引き抜こうとする際の「うんとこしょ、どっこいしょ」、協力者を求める際の「おばあさん」等、そしてそれに対する返事「はい」、抜けた後の喜びの表現「ばんさーい、ばんざーい」といったところのみである。そのかわり、かぶを引っぱる場面や劇の最後で手遊び歌を子どもたち全員が歌うことになっている。

シナリオを見る限りでは、ねらいのうち「言葉のリズムを味わいながら、言葉や動作の繰り返しを楽しむ」は、保育者によるナレーションや子どもたちが歌う歌、およびそれぞれの配役としての「演技」を通して達成されていくと思われる。もうひとつの「昔話を通して、みんなで協力することの大切さを感じる」については、とりたてて保育者が子どもたちに説明するようなことは参考書の記述を見る限り、ない。三歳以下の子どもたちの発達段階を考えれば当然のことであるが、劇遊びの活動全体を通じて、自然にそのようなことを子どもたちが感じとっていくことが期待されているということであろう。

次に、小学校での劇遊びの取り組みについて。ねらいについては「かぶの成長のようすと、おじいさん一家との交流、そして、かぶを抜くまでを歌と身体表現で楽しみます。」¹⁷⁾「演じる子と見る子が一体になって活動できる劇。」とある。

そして、シナリオから見て取れる特徴は、次の四点である。まず、物語がナレーションに相当する歌と登場人物の台詞とで進行していく点。歌も子どもたちが担うと解せる。次に、かぶの成長過程に於いて、おじいさんだけでなくおばあさんやまご、犬、ねこ、ねずみも登場しており、水や肥やしをやったり、成長具合を気にしたりなどの台詞や演技がある点である。その次は、かぶが抜ける場面になるとそれまで観客となっていた子どもたちが参加し、全員でかぶを抜く展開になっている点。最後は、劇の最後の歌の歌詞に「みん

なで 力を あわせたら 大きな かぶでも ぬけるんだ ぬけるんだ」とある点である。先に挙げたねらいを活動の中で達成できるよう配慮されたシナリオといえよう。

なお、ねらいのなかに「皆で協力することの大切さを知る。」等の文言は見られないが、最後の歌の歌詞の中に、また、観客となっていた子どもたちもかぶ抜きに参加するという構成に、そのような意図を認めることが出来ると考える。

以上、保育園・幼稚園での劇遊びと小学校での劇遊びのそれぞれの取り組みの概要について見た。前者が、三歳以下の幼い子どもの保育を想定してのものであることから単純な比較は難しいが、前者では内田訳の絵本「おおきなかぶ」の物語をほぼそのままなぞっており、かぶが抜けた喜びが焦点になるような活動、すなわち、内田訳テキストの特徴をふまえた活動となっていることは指摘できよう。

これに対して後者では、登場人物の活躍場面を増やすことで登場人物の印象を強めている点、物語のテーマ（協力の大切さ）を明示している点に、前者との顕著な違いが見られる。劇遊びに取り組む前には当然のことながら「大きなかぶ」の作品理解の過程、すなわち国語の授業が存在するものと考えるが、この劇遊びの前提になっている授業では内田訳西郷訳いずれのテキストが用いられたのかは、シナリオなどからは判断できない。しかし、にもかかわらず上記の特徴が、かぶ抜きに参加していった登場人物がより印象に残りやすく、また、かぶが抜けたのは皆で協力した結果であることに目がいきやすいという西郷訳のテキストの特徴と重なるところがある点は見過ごせないであろう。

おわりに

以上、「おおきなかぶ」の二つのテキスト、内田訳と西郷訳の違いが、保育園・幼稚園での活動と小学校での授業との違いにいかに関わっているかについて見てきた。

文章がリズムカルで、登場人物が次々に加わっていきやっとなら最後にかぶを抜くことが出来たという喜びの結末に向けてまっしぐらに進んでいく内田訳のテキストは、読み聞かせの声と絵本の挿絵から作品のイメージを子どもなりに掴みそれを生かす事を目指す保育にとって、ふさわしいものと考えられる。

一方、小学1年生なりに文章表現の細部に目を配ることで物語世界をより詳しく把握し、登場人物の思いや行動、あるいは作品テーマについても理解していくことを目指す国語の授業では、西郷訳のテキストの方が取り組みがしやすいであろう。

言うまでもなく、授業の進め方には唯一絶対のものがあるわけではない。その教材教材の特徴を生かすことで、様々な展開が可能ならばである。しかし、一見小さな違いと見える表現の違いが、授業の方向性に大きく関わることについては、やはり意識されるべきと考えるものである。

なお、本稿では授業の素材、つまり教材として扱うことを前提としてテキスト分析などに取り組んだが、文学としての評価はまた別物であることを申し添えたい。

- 1 西郷訳はアフナーシェフの版に依っているとされることがあるが、この点について田中康子は否定をしている。『「おおきなかぶ」のおはなし 文学教育の視点から』ユーラシア・ブックレット119（ユーラシア研究所・ブックレット編集委員会 東洋書店 2008年） 9頁
- 2 「共通教材にもとづく保・幼小連携の教育方法的検討 - 「おおきなかぶ」の実践記録の比較をてがかりに - 』『幼年教育研究年報』26 2004年
- 3 注1に同じ。4～5頁
- 4 『「おおきなかぶ」の授業』明治書院 2004年 112頁の西郷竹彦の発言より。なお、ロシアにおける「おおきなかぶ」の絵本ではどのようになっているかについては、田中前掲書の32～40頁に詳しい。
- 5 『国語教科書攻撃と児童文学』（日本児童文学者協会編 青木書店 1981年）58頁 細谷健治による引用より。原典は『小学国語1年 教師用指導書』教育出版。
- 6 注5に同じ。67頁。原典は『小学国語1年 教師用指導書』教育出版
- 7 注1に同じ。39頁
- 8 『「おおきなかぶ」の授業』明治書院 2004年 16～17頁
- 9 前掲書 13～14頁
- 10 注2に同じ。13～14頁
- 11 注2に同じ。15～16頁
- 12 注2に同じ。17頁
- 13 わたなべめぐみ『低年齢児の劇ごっこ集』（ひかりのくに 2002年）生越嘉治『小学校劇の本1 1～2年生の劇の本』（あすなる書房 1999年）
- 14 注13 6頁
- 15 注13 6～7頁
- 16 注13 54～61頁
- 17 注13 5頁
- 18 注13 8～19頁

引用・参考文献一覧

- 1) アレクセイ・ニコラエヴィチ・トルストイ作 内田莉莎子訳 佐藤忠良絵 「おおきなかぶ」福音館書店 1966年
- 2) さいごうたけひこ「大きなかぶ」『こくご一上 かざぐるま』光村図書 2008年(平成16年検定済)
- 3) ユーラシア研究所・ブックレット編集委員会『「おおきなかぶ」のおはなし 文学教育の視点から』ユーラシア・ブックレット119東洋書店 2008年
- 4) 深澤広明・大本紀子「共通教材にもとづく保・幼小連携の教育方法的検討 - 「おおきなかぶ」の実践記録の比較をてがかりに - 」『幼年教育研究年報』26 2004年
- 5) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社 2008年
- 6) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 2008年
- 7) 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館 2008年
- 8) 西郷竹彦監修 荒木英治著『「おおきなかぶ」の授業』明治図書出版 2004年
- 9) 渋谷孝・市毛勝雄編『「おおきなかぶ」の言語技術教育』明治図書 1997年
- 10) 日本児童文学者協会編『国語教科書攻撃と児童文学』青木書店 1981年
- 11) わたなべめぐみ『低年齢児の劇ごっこ集』ひかりのくに 2002年
- 12) 生越嘉治『小学校劇の本1 1～2年生の劇の本』あすなろ書房 1999年